

## 書評

田中金司著 『金本位制の回顧と展望』

阪口伸六郎

はしがき

本書は田中教授が名著「金本位制と中央銀行政策」を出されてから過去二十數年に亘る研究の集成であり、結晶である。舊著を出された昭和四年十月から本書の昭和二十六年十一月に至る迄、世界の通貨制度は第二次世界大戦を経て、混乱と激動の中に大なる變貌を遂げて新しい形態を呈しつつある。この時に當り著者は、新しい形態を繞る問題について多年の蘊蓄を傾けて取り組まれ、造詣深き古典理論の上に近代理論の新學說を探り入れて、トランスファー理論を系統づけ斯學における科學的體系の大金字塔をもち上げられたのである。

私は山口茂教授の研究會において本書を讀む機會を與えられたのであるが、厚さ全卷四〇六頁『國際金融理論の動向と國際通貨基金』という副題のついた本書は、廣汎精緻なる内容と理論がぎつしりと滿ち溢れていて、素養乏しい淺學未熟の初心者

にとつて、こゝに一文を草することは非常な重荷ではあつたが、これを機縁に今後著者に親しく御指導を仰ぐよすがともなれば、筆者にとつて光榮これに過ぐるものなく望外の喜びこれより大なるはないのである。

### 一 第一編 金本位制の理論

本書の序において、第一編は金本位制の基礎理論を取扱つたもので、第一章においてこの制度の意義及び種類を概説し、第二章においてその對内的機構を、第三章及び第四章においてその國際的機構を検討したと記されている。

著者は「金本位制とは金の價格が確定し、この確定價格の下に金より貨幣へ、貨幣より金への轉換が自由に行われる貨幣制度である」とされ(四頁)、金本位制の下において金の價值と貨幣の價值とが常に等しいというのはいい過ぎであつて常に等しからんとする傾向ありというに過ぎないとして(九頁)、更に金屬學說・名目學說の對立は靜態の領域よりもむしろ動態の領域にあるのであるから、金屬主義者がいかに靜態において貨幣の價值が金の限界生産費に一致することを説明しても、金の限界生産費そのものが、貨幣の價值の變動によりて變化し、または變化を可能ならしめられることを否定するに充分な證據を示さざる限り、各目學說に對する追究において最後の論的を逸するものといわねばならぬと斷定する(二四頁)。以上は對内機構に就いてであるが、その國際的機構に對しては一層重點的に説

明して次の如くいう。

古典理論においては、物價、貿易、金移動の三作用が絶えず相互に作用し、物價均衡、貿易均衡、金分布の均衡の三重の均衡を成立せしめんとして止むところを知らない。かくして國際經濟は絶えず一つの均衡より他の均衡へと推移する（六六頁）のである。

新「古典理論」においては、「古典理論」の外延的修正としては金流出に對する最も有力な矯正手段としての割引利率變動の役割を強調し、内外金利差による投資利得と爲替相場の變動による投機利得が資本の移動に對して持つ關係は單純でない指摘する（七五頁）。内包的修正としては金移動と通貨數量との關係は、（統制された金本位制において考察されていて、）貨幣統制機關は金の増減により影響を受けながら、その影響を強化又は緩和し、時にはこれを逆轉せしめることを得ると説き（七九頁）、通貨數量が物價に及ぼす影響としては、國內品、輸入品、輸出品の部門別價格水準の分析の結果、價格水準における重要な變化は國內市場商品について起り、國際商品の價格にはさしたる變化を見ないことに注目する（八三頁）。物價變動が輸出に及ぼす影響としては、先ず需要の價格弾力性と交易條件との關係を吟味して需要の強度と需要の弾力性とを區別を力説され（八七頁）、供給の弾力性を併せて研究し實際問題との關係においては、第三編の爲替相場の變化に應ずる國際收支の弾力性を論ずる際に考究すると記している。不換紙券制下の收支

均衡過程は根本の理義において變りなく（金本位國間においての過程と）、國際經濟均衡を調節する最も有力な動因が爲替相場の自動的調節作用である（九五頁）と説いている。

近代理論による説明においては、古典理論は需要状態の不變を前提とするに反し、近代理論は需要状態の變化を注意するのであり、古典理論においては需要の價格弾力性が重視されるに對し、近代理論においては需要の所得弾力性が重視されるといふ。そして近代理論における三つの論點として、貨幣的購買力移轉の機構・貨幣所得の變動・需要の所得弾力性を挙げ、古典理論においては「貿易が投資に從う」面が強調されたのに對し、近代理論においては「投資が貿易に從う」面が力説されている（一二三頁）。そこで、著者は古典及び近代兩理論の綜合の中に正しい方向が見出されるべきであるという見解を持ち、第三編第四章第四節にて價格効果と所得効果との結合を試みられているのである。

第五章金本位制下の購買力平價説においては、カッセルの購買力平價説は多數學者の見解に従えば金本位制下に應用できぬと見られているが、金本位國間においてはただ實際の爲替相場が結局、金輸出入兩點以外に出ることが殆んどないために不換紙券制の場合に比し異つた外觀を呈することはあつても、爲替相場と物價との各々が他方を無視して長く離反の状態を持続し得ずとの購買力平價説の根本原理に至つては何ら異なるところを見ないといひ（一四五頁）、金本位國間の購買力平價が不換

紙券制の下におけるそれと異なる點は後者がその移動極めて自由にしてその範圍殆んど無制限なるに反し、前者が實際の爲替相場と同じく結局は金輸出兩點の間に踞踏すべき運命を擔つゝの一事のみとみる(一四五頁)。要するに、購買力平價説の妥當性を貨幣制度の如何によつて是非せんとすることは謬見たるを免かれないのである(一六三頁) いう。

## 二 第二編 金本位制の回顧

本書の序において、第二編は兩大戰間における金本位制の復歸及び再離脱の過程において國際通貨制度の上に展開された主要な施設を考究せるものにして、第一章において事態の推移を概観した後、第二章及び第三章において金本位制の新形態としての金地金本位制と金爲替本位制(及び金爲替準備制)とを、第四章及び第五章において金本位制離脱後において出現せる新施設として爲替平衡資金制度と三國通貨協定とを採り上げ、これらの諸施設を國際通貨制度發展の階梯として捉え、戰後の國際通貨基金制度が決して突如として生れ來たりしものにあらずることを論評せんとすると記している。

著者は金地金本位制を論じて、金本位制の眞意義は金の量と貨幣の額とが一定の比率をもつて結びつけられ、その比率を基準として貨幣の價值が調節されて行くところにあるのであるから、金本位制の必要條件としては、(一)確定價格による金と貨幣との轉換の自由並びに(二)その處分の自由(金貨鑄造、

金輸出等の自由)をもつて充分とするといひ、従つて金貨は金本位制の必要條件ではないと考へてゐる(一八九頁)。即ち金貨の廢止、これが金本位制が踏み出すべき合理的進展の第一歩である(一九六頁)。この點において、第一次大戰後復歸した金本位制が金地金本位制の形をとつてゐることは、それは金本位制における退歩ではない、否むしろ一步前進であるといふのである。

金爲替制度の意義については、幣制の進化を方向づける標識の一つを本位財と流通貨幣との分化に求め、この制度が金本位制の經濟化と貨幣制度の合理化の上において、貨幣職能分化の國際的完成へ一步を轉ずるものである(二一九頁)。中央銀行の正貨政策並びに爲替政策の上においては、在外正貨を正貨準備の一部に充當しつつ爲替變動を通じて貨幣を調節するから、従つて金不足に悩む各國の經濟的困窮打開の經驗に役立つ、最近の國際通貨制度の傾向と趣を一にするものにして、運用よろしきを得れば金爲替制度は適度にして健全なる發展を期し得るといふ(二三二頁)。

爲替平衡資金は開設の當初は金本位制停止中の一時的措置と考へられ、多くの場合は金本位制復歸の曉には當然廢止されるべきことが豫想されていた。しかし三國通貨協定が主要諸國の平衡資金間における協調によつて著大な効果を齎らし、第二次世界大戰後發足した國際通貨基金制度においても、爲替平衡資金は基金との取引當事者の一つとして依然重要な地位を與えら

れていると力説される(二七五頁)。

即ち國際通貨基金制度の先驅者としての三國通貨協定は、金本位制崩壞の最後の段階において成立したものであつて、完全な貨幣的國家主義より貨幣的國際主義へ轉ずる重要な第一歩であつたといひ得ると(二九二頁)。

### 三 第三編 金本位制の展望

金本位制の後に來るものとして第二次世界大戰後における新制度としての國際通貨基金制度とその周邊の諸問題とを考察し、第一章において「基金」の機構を説明し、第二章ないし第四章において「基金」運用上最も問題とされる均衡爲替相場及び平價變更に關する諸論點を究明したと本書の序に述べている。

國際通貨基金は第一次及び第二次兩世界大戰間において世界諸國が嘗めた苦い經驗を繰返すことを避けんとする努力より生れたのであつて、一九二〇年代の經驗は金本位制が爲替相場の硬直性によつて國際的均衡を維持せんとし、しばしば國內經濟に耐え難い犠牲を強いた。そのために諸國は相次いで金本位制を放棄するに及んで、國內的均衡を無視した國際的均衡は結局において破綻することを示した。一九三〇年代の經驗は諸國が金本位より解放され相互に獨立せる貨幣制度を採用したために、爲替相場は絶えざる變動に曝され、名目的爲替相場維持のために強度の爲替管理が實行され、國際經濟秩序は極度に混亂した事實を教えている。即ち國際的均衡を顧慮しない國內的均

衡も亦永續し得ないことが明らかにされた。ここにおいて國內的均衡と國際的均衡とをいかにして調和すべきかが國際通貨制度の前途の問題となり、金本位制と不換紙券制度の長短を取捨してその綜合としての貨幣制度における第三形態が考えらるべき段階に至つたと(三二三頁)述べている。

國際通貨基金の運用に重要な平價變更とこれをめぐる均衡爲替相場の理論においては、古典的金本位制時代には金の移動が過去において國際收支均衡化の上に頗る重要な役割を演じたが、最近の傾向に徴すれば、金の移動の外に國際的短期資本の移動が均衡項目たる機能を營み、短期資本の流入は金の流出に該當し、前者の流出は後者の流入に該當することに注意するべしと説き(三三〇頁)、不均衡化的短期資本移動を均衡項目に含ましむべきや否やについては、それが金移動の形において行われるか商品移動の形において行われるかによつて異なるべきであるとする(三三四頁)。そもそも國際收支の均衡は均衡爲替相場の必要條件ではあるが充分條件ではない。不均衡はその影響を國際收支の不足の中に表わさずして、經濟活動及び所得における激烈な減退の中に表われている(三三九頁)。従つて均衡爲替相場は(一)一定の期間にわたり正常的國際收支を均衡せしめる爲替相場であること、(二)國內經濟にデフレーション及び一般的失業の壓迫を加え、またはインフレーションの影響を齎らさぬこと、(三)貿易制限の増設を必要としないこととの三條件を備えねばならぬこととなるのである(三四一頁)。

それ故に基礎的不均衡の存在は爲替相場改訂の必要條件ではあるが充分條件ではない。そして爲替相場改訂によつて齎らされた國際收支の均衡は國民經濟構造における歪曲を永久化するに終るであらうと(三四四頁)。

購買力平價が國際收支を均衡せしめる爲替相場なりや否やの問題では、購買力平價と實際の爲替相場との一致・不一致の問題ともいえるが(三五〇頁)、一般物價指數の基礎の上に算定された購買力平價は、到底均衡相場に一致し得べくもない。國內價格が爲替相場を決定するにあらずして、むしろこれに追隨するのであつて(三五二頁)、爲替相場の決定に相對的物價水準の變動のみならず、交易條件の變化が重要な關係を有するし、爲替相場指數が兩國物價指數の比のみならず、國際的需要の状態にも依存するのだ(三五五頁)。だから購買力平價説は(一)現實に遠い諸前提の上に立つている、(二)たとえ物價水準の相對變化がなくとも交易條件の變化があれば、爲替相場が變動することを忘却し、(三)たとえ爲替相場に變動がなくとも所得に變化があれば、國際收支が影響を受けることを看過して、等の缺陷を有すると。従つて、その理論的妥當性及び實際的適用性は著しく制限されざるを得ないという(三五七頁)。

國際收支の弾力性に就いては、先ず短期的影響と長期的影響とを區別することが必要であるとし、また國際收支の弾力性が大なるほど爲替相場(受取勘定建)の引下を必要とする程度は少なく、従つて交易條件を悪化せしめることも少なくて済むの

だ。だから爲替相場(受取勘定建)さえ引き下げれば、國際收支が容易に改善されると漠然と考へるのは餘りにも粗雑な見解であつて、爲替相場改訂については自國の貿易構造、外國市場の動向その他を充分考慮して、その可否、その程度及びその時期を決定しなければならぬ(三八三頁)と指摘する。

投資乗數と貿易乗數との關係に關しては、國內に豊富な金準備もなく、また國際的協調による投資効果が期待し難い場合には、投資乗數と貿易乗數との關係を利用して國內投資政策と爲替相場調整とを適當に結合することにより、完全雇用と貿易均衡とを併せて實現しなければならぬことが考へられるであらう。けだし、投資増加は所得増加と共に入超を齎らし、輸出増加は所得増加と共に出超を齎らすから、この貿易面における二種の乗數効果を互に相殺せしめ、所得増加と共に貿易均衡を達成し得るはずだからである(三九六頁)。ここに國際收支の價格弾力性と所得弾力性との結合の問題が(四〇四頁)生ずるゆえんであると強調される。

以上要するに著者の到達せる結論は、開放體制における投資乗數の性格を利用することにより、爲替相場の安定を犠牲にすることなく、また投資乗數と貿易乗數との性格の相違を利用することにより、爲替相場の變更を最小限度に止めつつ、國際收支の均衡と完全雇用の達成とが可能なるべきこと、及び爲替相場變更の適否及び程度を知るためには國際收支の價格弾力性(價格効果)と所得弾力性(乘數効果)との結合が必要である

というにある。

今私は本書の内容の素描的な紹介を終えたが、正直のところ著者の深きしかも冷厳なる理論的分析に對して、貧弱な理解力をもつては到底齒が立たない。従つてこの内容の紹介は甚だしく杜撰なものを敢えてして忤怩たるものがあり、誤れる紹介ではないかと恐れつゝ著者に衷心より深くお詫びせねばならない。

#### 四 田中金司教授に高教を乞ふ

第一編第一章第一節金本位制の意義において、金本位制の定義として第一に「金の一定量（の價值）をもつて價值の標準又は單位となす貨幣制度なり」とする見解、第二に「金貨のみに無制限法貨たる資格と自由鑄造とを認める貨幣制度を以て金本位制とする」定義、第三に「金本位制とは貨幣單位と金の一定量とがその價值を常に等しくする貨幣制度である」という定義、第四に田中教授御自身の定義を擧げている（本稿最初に既述）。まことに金の貨幣的用途には種々の段階があり、諸學者の金本位制の定義をめぐる見解や論議は紛糾を極めてゐる。

一八一六年英國が金本位制を採用してから、第一次世界大戰に至る迄の一世紀間、世界の本位制の大勢は英國の本位制にならつて統一された。従つて今英國の本位制を中心にすこしく考察をすゝめてみると、「十九世紀英國における通貨供給の理論としての通貨主義は、國際金本位制を内容とするものであり、

通貨供給は、國內問題であることは勿論であるが、國際金本位制なるが故に、それは國際的關連において國內問題を處理する方式である。されば通貨主義が國際本位の主義であるに對し、銀行主義は國內本位の主張である。そこで通貨主義は國際間に移動する金を通して、銀行主義は外國貿易を通して、若し夫々の立場において直ちに適當なる通貨供給が行われるならば、結果は兩者一致すべきが故に、兩主義はそれぞれに排他的に自己を主張すべき根據をもつも、十九世紀における世界經濟の構成は、凹凸相應じ相合する異質的構成分子による構成であつたから、

かくの如き世界經濟の實勢に應ぜしめんが爲めには、たとえ理論的に通貨主義と銀行主義とが各々排他的に主張せられたとしても、反つて互に相補うものとみなし得るであらう」と山口茂教授がいわれる點（一橋論叢第十九卷第一・二號）また銀行主義と通貨主義とは十八世紀においては互に獨立して行われ、十九世紀は時代としては金本位制による通貨主義時代であり、英國は通貨主義に他の國々は銀行主義に重點を置いていたし（一橋論叢第二十八卷第三號山口茂教授論文）、英國を中心とする國際金本位制は同時に管理通貨制度であつた（一橋論叢第十六卷第三・四號山口茂教授論文）という如き點を考慮する時、即ち金本位制下においても、通貨は全流通經濟のシステムによつて規定せられ、金は只直接の規準を與えるに過ぎない。金本位制離脱の場合は、通貨における生産費の規定を缺くに至るのであるが、物價水準の名目的變動を通じて財貨側システムを基盤

として管理を行わねばならなかつた。

斯かる見地より金本位制下の貨幣の價值を見ると、長期的には變動を免れ得ないも、短期的には金による自動的調節作用をもつと考えられた従来の立場を、貨幣觀の上よりすれば金屬主義となり通貨供給理論よりすれば通貨主義とみられるものに、物價ないし貨幣價值の變動における内容的變化と關係的變化との二元的理論を妥當せしめねばならぬであらう。

田中教授は金屬學説においては金の價值理論があるのみである(二五頁)といわれるが、貨幣の價值が金の價值を決定するのは價值の尺度としての意味でいわれているのではあるまいか? 通貨の價值と本位貨幣の價值とは内容的に性質を異にするものとして理解せらるべきであるのか? (價值性格一變・支配される價值法則を變える・使用價值缺如等三一頁) 金の價值が貨幣の價值に制約を加える點よりも、通貨供給の立場より兩者の内容と關係とを密接に考察したならば金屬主義・名目主義の對立は如何に解せられるであらうか? 私が著者にお伺いしたい第一の問題である。

次に田中教授は平價變更をめぐる均衡爲替相場の問題、平價變更の經濟改善作用を決定する國際收支の弾力性の問題を探り上げられ、この諸問題を精密に分析せられ組織的に論述せられ、金本位制の世界的再建を目指して開放體制乘數の展開を企圖されている(季刊「理論經濟學」第四卷第二號)。

私は平價改訂を問題にするとき、その國の生産水準と輸出入

書 評

數量水準を分析する必要があり、そして輸出産業の企業利潤率を測定して輸出品價格を算定せねばならないと思う。周知の如く均衡爲替相場の理論には購買力平價説・爲替心理説・國際收支説の三つの立場があるが、現在は國際收支説が支配的である。

田中教授も收支説の立場より均衡爲替相場の條件を三つ擧げられているが(三四一頁)、(一)の一定の期間について二、三年とするか、季節的變動ばかりでなく景氣循環的變動をも除去するために五年ないし十年とするかは兎も角、均衡さるべき國際收支項目としては短資移動をいれるのは通説であつて問題はな  
いが、著者の指摘される通り不均衡化的自生的資本移動をも含めるかについては學者の間に問題がある。經濟的後進國が長期資本を外國に仰ぐ場合は、國際收支調整の目的をもつてなされるものであるから、均衡項目に含ましめるのが至當であるとされる著者の御高説に敬意を表するも、實質的な理論の意味より云つて、更に長期資本の産業流通・短期資本の金融的流通的機能を古典的價格的調整と近代的所得調整との兩方策より再検討さるべきではなからうか?(三四四頁) 對外均衡と國內均衡を兩立せしめる均衡爲替相場の理論として、最近唱道されているハンセンのコスト・ストラクチャー・パリティや鬼頭仁三郎教授の「生活水準を基礎とする爲替比率」等についての著者の御見解を御伺いしたいのである。これが第二の質問の問題である。

第三の問題は國際收支の弾力性についてである。後進國の輸入需要價格弾力性が大なることは、その減退した所得水準によ

つて限界づけられる點に注目すれば、爲替レート切下の所得効果や輸入の輸出弾力性の問題を考へる時、著者は爲替レート改訂についてその國の貿易構造や外國市場の動向を重視されるが(三八三頁)、この點よりすれば分析を價格効果にとどめず、所得効果の分野に迄もおし進めねばならない。すると爲替安定條件は單に「輸出入需要の價格弾力性の和が(マイナス)一より大」であることにとどまらず「一よりかなり大」であることが必要でなければならぬ。これが質問の第三である。著者はこれに對して如何にお考へになるか?(生産側の分析を重んずればどうなるか?)

以上三問題を教授に提出したが、問題の焦點甚だ曖昧、正しく蠅螂の斧を振つて強者に向う、「ていたらく」の質問、平に御賢察の程をお願いする次第である。

### むすび

現在國際通貨基金における改訂について考へると、同協定において現物爲替その他についてパーセントのマージンを認められた根據はよく分らない。この程度の變動が、基金の性格(金本位的)をかえるのか? 實際相場が平價から著しく乖離するようになればその實質的意義が失われるのか? 金融機構が經濟の現實に對して獨自の存在意義を有する點に鑑みる時、三十年來の經驗は、われわれに、經濟政策の目標は物價や爲替相場の安定におかれるよりも所得と雇用の安定におかれるべきことを

教えているも、然し國際經濟における基本的な政策の第一は安定的な貨幣の對外比率の制度を回復することに在る。本書は將にこの渴望を滿す理論的研究である。完全雇用と國際收支均衡との同時的達成を成し遂げられたのである。ペルトラン・ノガロは『現代經濟の焦點』(久保田明光譯一三七頁)において、爲替平衡資金を目して「かくして、金の媒介なしに一定率で直接に自國貨幣を外國貨幣に、外國貨幣を自國貨幣に換へるに至つたのである!」といつてゐる。田中教授は得難き好著本書に依つてこの大偉業を名目主義の立場を買いて完成樹立された。本書に對して山口茂教授の「君、あの本は良い本だよ! 若い人が讀めば大いに勉強になるぞ!」といわれた聲が今も耳朶に響いて來る。切に田中教授の健在を祈りつゝ拙い筆を收める。

WW・A・A・ヘイトン(ウィニニア)共著 『資産會計』

W. A. Paton & W. A. Paton (Jr.); Assets  
Accounting 1950. pp. 549. New York

新井益太郎

はしがき

アメリカ會計學界の耆宿ミシガン大學W・A・ヘイトン教授